

海の道と陸の道が出会うクロスロード——敦賀。

● 海の道と陸の道が交わるまち

敦賀は、日本海を通じた大陸交流や北前船の寄港、北陸道や京へ通じる街道、そして鉄道が行き交う交通の要所として栄えてきました。**海の道と陸の道が出会い続けたクロスロード**——それが敦賀です。

● 信仰と交流の象徴

北陸道総鎮守として人びとの信仰を集め、大陸への玄関口でもあった**氣比神宮**は、**クロスロードの象徴**です。702年に創建されたと伝わり、9世紀には渤海使を迎える松原客館が設けられ、宮司がそのもてなしを担っていました。やがて勅使や将軍も参拝し、江戸時代には「**敦賀まつり**」の**中心**として港町を盛り上げました。

● 今に息づく物語

北前船が運んだ**昆布**は敦賀を経て京（京都）、そして江戸へ広まり、**日本の食文化に欠かせない「旨み」**を届けました。海の時代、陸の時代——それぞれの道が重なり合い、敦賀はいつも交わりのまちとして歩んできたのです。その物語は、今も街の風景や人びとの暮らしに息づいています。

1 | 鳥居をくぐる —— 氣比神宮 大鳥居

氣比神宮は、古くから「神と仏が共に」祀られていた代表的な神仏習合の場所でした。奈良時代には境内に神宮寺が建てられ、鐘楼や塔もあったと伝えられています。いまでも残る大鳥居が仏教由来の「両部鳥居」という形式なのは、その名残です。明治の神仏分離で寺院はなくなりましたが、祈りと仏教文化が交わった歴史は、敦賀ならではのクロスロードの記憶です。

【大鳥居】日本三大木造鳥居の一つ（春日大社・厳島神社と並ぶ）。昭和の敦賀空襲で多くの建造物が焼失する中、この大鳥居は奇跡的に焼失を逃れ、現在に至る。神様の力が宿る「幸運の象徴」とも言われる。

結界

「結界」とは、神さまの世界と人の世界を分ける境い目のこと。鳥居をくぐるのは、この結界を越えて神域に入ることを意味します。



2 | 蔵囲昆布蔵をめぐる——奥井海生堂

敦賀は北前船で運ばれた昆布文化の拠点。明治4年創業、高級昆布の老舗「奥井海生堂」で、蔵囲昆布蔵の見学、昆布だしの試飲を体験。敦賀の昆布文化を支えてきた背景には、氣比神宮に祀られる「食の神」への祈りもありました。食をつなぎ、暮らしを支える信仰とともに、昆布のUMAMIはこの地から京や江戸へ、そして世界共通の味覚になりつつあります。

【奥井海生堂】日本の高級昆布専門店、食文化と昆布の伝統を今に伝える貴重な存在。旨味文化のグローバル化。近年、Western chefs（欧米シェフ）にも“umami/dashi base”として昆布の利用が広がっている。

旨味 UMAMI

日本の食文化を世界に広げた第五の味覚、それが **旨味 (UMAMI)** です。昆布に多く含まれるグルタミン酸をはじめ、発酵や調理の工夫を通して生まれる味の深みは、日本人が古くから大切にしてきた「見えない美」のひとつ。



@HYAKKEN

3 | 昆布を使ったお料理を味わう——ソニョーポリ

イタリア料理レストラン「ソニョーポリ（イタリア語で「夢の町」という意味）」のシェフ・山本剛司さんは、福井県産の素材を可能な限り扱うという「地産地消」スタイルをとっています。特に今回は、コース料理のなかに「昆布」をもちいたメニューをご用意いただきます（4～5種の前菜、パスタ、お魚料理、デザート）。

店名：ソニョーポリ

場所：〒914-0072 福井県敦賀市金ヶ崎町4-1



<https://www.instagram.com/p/C54vmZHyzb/>



<https://tabelog.com/fukui/A1803/A180301/18000046/>

あわせ

「一つの素材を際立たせる」のではなく、異質なものを重ね、調和をつくり出すこと。十二単の襲色目、花合わせ・香合わせから、擬洋風建築、そしてたらこパスタなど、異なるものを響きあわせることで、新たな価値を生んできた。